

《留学体験記》

## 「灰色の都」で出逢った人々 ——冬のベルリン長期留学体験記——

林 祐一郎

### はじめに

プロイセン史を研究する私は現在、ドイツの首都ベルリンに留学中である。この都市はかつてのプロイセンの王都でもあり、同地にはプロイセンに関わる史跡や文書が多数存在するため、自分にとって宝の山のような環境である。だが他方で、同地は緯度が高いことから冬の日照時間がかなり短くなる。曇天の日が多く、日中も光があまり届かないことが多い。まさに「灰色の都」である。

11 月末頃には明らかに自分の心身の調子がおかしくなった。夜は眠れず、作業をするにも腹痛のために一定の場所で長時間座ってられず、便所へ行くと排泄物に血が混じっていることもあった。結局、大学の授業には行けなくなった。ほぼ同世代の人間たちが史料調査を進めたり、研究成果を発表したりしているのを知るとかなり焦ったが、それでも動けず、ほとんど何もできない生活を送っている自分が惨めに思えた。

だが、どれだけ長くても冬はいつか終わる。私の気分は 1 月から 2 月へ移行する辺りから上向きになっていった。この要因としては、新しい研究の方向性を見つけたこと、思い切って授業に出ることを一切やめ、頻繁に旅行や温浴をするようになったことなどが挙げられるが、私がここまで生き残れた背景には、周囲の人々との思い出もあった。本稿はそうした人々の中でも特に印象深い三人を取り上げる。

### 1. アレクサンダー・シュンカ先生 (Dr. Prof. Alexander Schunka)

アレクサンダー・シュンカ先生を知ったのは、私がベルリンの大学へ長期留学をしようと決めて、自分の研究分野に近い研究をしている先生が居ないかどうかを調べている時だった。それまでは、不勉強にも彼のことを知らなかったのである。ベルリン自由大学のフリードリヒ・マイネッケ歴史学研究所に教授として所属する彼が、私が研究対象としているユグノーの歴史について講義を行っているという情報を手に入れ、私は同大への留学を決め、メールによる接触を図った。果たして、彼の研究成果は 2019 年 3 月に出版されている<sup>1</sup>。私が自己紹介と面会希望のメールをシュンカ先生へ送ると、数日後にメールが返ってきた。この遣り取りで、私がドイツ学術振興会 (DAAD) の短期語学留学のためベルリンに滞在する 3 月、彼と対面することになった。

---

<sup>1</sup> Schunka, Alexander, *Die Hugenotten. Geschichte, Religion, Kultur*, C. H. Beck: München, 2019.

やがて10月から冬学期が始まった。私が参加したシュンカ先生の演習「主の使命で——近世の自伝における宗教と移動」<sup>2</sup>は、非常に開放的な雰囲気での授業であった。時には乳児を抱えた男性が学生として出席し、発言している様子も見られた。先生は学生たちに何度も話題を振りながら、90分以内には終えなければならない授業を巧みに組織していた。シュンカ先生は「今日は子供を迎えに行かなくてはならないから」と昼過ぎに大学を退勤することがあり、家庭人としての姿を垣間見せることもあったが、学生の指導にも熱心で、多忙のためコロキウム後の懇親会で論文指導が始まることもあった。だが、このコロキウム後の懇親会が私にとっては負担となった。私の語学力と瞬発力の欠如から、周囲の話題についていけなかったのである。

このように口頭での意思疎通に問題があった私にとって、彼と有意義な交流ができたと思えるのは、メールでのやり取りであった。特に彼が昨年3月に出版した著作の内容に関して、私はメールでいくつか質問を試みたことがあったが、その時の彼の回答が印象的だった。彼は同書の出版に際してベルリンの左派系日刊紙『ターゲスツァイトゥング』(Tageszeitung, 略称: TAZ)の読者たちを前に講演会を開いていた。そこで、私は現今の移民・難民問題とも通じるテーマを研究するドイツの歴史家がその仕事に如何なる意義を見出しているのかが気になり、「移民政策に対するあなたの(あるいは歴史家の)影響力にどのような意義があるのか、これについてあなたはどのように思われますか」と聞くと、このような回答が返って来た。

私はもともと、少し前に一度、フランクフルト・アン・デア・オーダー大学で講演を行いました。そこには難民活動家も、AfD<sup>3</sup>の地方政治家のような人も出席していました。両方に都合の良いことは言えず、どちらも幸せにはなりません。何らかの方向性を持った簡単な答えが決して出ないこともあるというのは問題です——そしてチャンスでもあります(開放も遮断も完全なものには有り得ないのです)。だから、歴史家の課題が政治的議論に直接介入することであるかどうかということについて、私は懐疑的でもあります(これについて歴史家連盟は2018年にミュンスターで決議を出しました。これはインターネットで見ることができます<sup>4</sup>。この決議に私は個人的にか

---

<sup>2</sup> Ebd., „Im Auftrag des Herrn unterwegs. Religion und Mobilität in Selbstzeugnissen der FNZ“, [https://www.geschkult.fu-berlin.de/e/fmi/bereiche/ab\\_schuncka/lehre/19wise/13158.html](https://www.geschkult.fu-berlin.de/e/fmi/bereiche/ab_schuncka/lehre/19wise/13158.html) (2020年3月11日閲覧確認)

<sup>3</sup> ドイツの極右政党「ドイツのための選択肢」(Alternativ für Deutschland)。ドイツ国内の移民や難民の排斥を訴えている。

<sup>4</sup> 2018年9月27日に採択された「民主主義の現在の危機に関するドイツ歴史家連盟の決議」。冒頭には「他の多数の国々と同様、ドイツでも今日、民主主義的な制度に対する度を越えた攻撃が政治的秩序の基礎を脅かしている。歴史家として我々は、こうした危機について警告することが我々の義務だと考える。論争は多様性ある社会において不可欠のものであるが、民主主義そのものを蝕むことにならなければ、一定の規則に従わねばならない」、また「歴史学には、歴史的展開の分析を通じて、現在の諸問題に関するより良い認識にも寄与し、それらの原因を浮き彫りにするという課題がある。次第に世論調査の印象や常に性急なメディアの動向に動かされようになった政治を見るに、我々は、より長期の時間間隔で思考することだけが我々の政治的制度の将来性を継続的に保証し得るのだと強調したい」とある。以下参照。 <https://www.historikerverband.de/verband/stellungnahmen/resolution-zu-gegenwaertigen-gefachrdungen-der-demokratie.html> (20

なり同情的ですが、学者としては使いものにならないと思います)。私は歴史家の課題をむしろ、過去に特定の問題がどのように扱われたのかについて幅広い理解をもたらすということの中に見ています。私の願いは、そこから再び現在と未来へのより良い理解が発展させられることです。

移民・難民問題が取り巻くドイツにおける移民史家の微妙な立場が窺い知れると共に、一学生のこのような質問に対しても丁寧に回答して下さったシュンカ先生の誠実さが感じられる遣り取りであった。

1月に私が授業へ出られなかった時には、そのことについて私がメールを差し上げると、「演習はそもそもあまり重要ではありません。健康の方が遥かに重要です」と返して下さり、少し気分が楽になったような気がした。しかし、彼には迷惑ばかりかけておいて、何ら恩返しができていないことが悔やまれた。今回の留學生活の後半で、自分から何らかの成果を示せればと思う。

## 2. オラシオ・ロダス・カステイリョ君 (Horacio Rodas Castillo)

二人目は、私が9月の語学講座の初日に知り合ったメキシコ人留學生のオラシオ・ロダス・カステイリョ君である。彼はメキシコシティの出身で、独文学徒としてカール・クラウス (Karl Kraus, 1874-1936) を研究していた。私が語学講座で所属していた学級はB2.1で、つまり中級だったのだが、彼の実際の語学力は上級の水準だったらしく、彼は2日目から上の学級へ昇進していた。後で本人から聞いたところによると、彼はミュンヘンのギムナジウムで一年間留學していた経験があるという。私と彼との間には語学力に歴然とした差があったものの、私と彼とは下宿先の学生寮が同じだったため、帰り道で不意に合流することも多く、いつの間にか仲良くなっていった。私の拙い語学力にも拘わらず、彼は私の話を熱心に聞いてくれ、また毎週末に決まって飲みや遊びに誘ってくれた。彼を介して何人か友人も増えた。

彼との交流の中で最も印象深いのは、私が精神的危機に瀕していた12月中旬の出来事である。この時、私は自分の近況を綴った長文をドイツ語でフェイスブックに投稿した。あまりにも状態が酷かったので、何らかの形で言語化しないとどうにかなりそうだったのである。全てがどうでもよくなり、泣きながら学生寮の部屋で酒を浴びるように飲んでいたら、投稿を見たオラシオ君が心配して、菓子類を持って別棟からわざわざ私の部屋までやって来た。彼にお礼を言ったところ、「友達だから当たり前」とのことだった。台所で1時間ほど会食した後、別れ際に「何か辛いことがあった時は一緒に飲みに行こう」と言ってくれた。私は便所の個室で隠れて悔し涙を流すことが常になっていたが、この後に自室前の便所で流した私の涙は別の意味合いを持っていた。

この出来事以来、我々二人の仲は更に深まり、気分転換のため 2 月には二度の外国旅行を計画した。それは、二泊三日のヴィーン旅行とヴェネツィア旅行であった。ヴィーンは彼の研究対象でもあり、一生に一度は行ってみたいという憧れの場所でもあった。ヴェネツィアについては、彼は既に何度か滞在した経験があったが、彼曰く「お前の最初のイタリア旅行としては良い選択」だったそうである。さて、ヴィーン旅行の初日、中央駅で半時間ほど彼とゆっくり話す機会があった。そこで彼が語ったのは、祖国メキシコの現状である。彼の在籍大学はメキシコの学生運動の拠点の一つでもあり、ベルリン自由大学や京都大学と同様、学生による異議申し立てが絶えないという。この背景の一つとして、メキシコでは女性の地位が他国と比べて低く、人権という観点から見てよろしくない状況が続いているようだ。また国内政治は汚職と腐敗に塗れているため、こうした状況が 1968 年の「トラテロルコの虐殺」(La masacre de Tlatelolco)<sup>5</sup>のような暴力的な弾圧に発展しないかと彼は心配していた。そのような中、彼のような金銭と教養に恵まれた人間は、英語やドイツ語を学んで中南米を「脱出」することで、活路を見出そうとしているようだった。学部生である彼の専攻はドイツ文学だが、卒業後は経営学を修めて就職に活かしたいとのことだった。

私が普段彼と会話する時は、大して知性も無い、ふざけた内容の、特に酒や食に関する話をすることがほとんどであったが、たまに交わされる真面目な会話が印象に残った。そこから感じられたのは、彼の他者に対する敬意であった。彼は非常に気遣いのできる人物であり、常に私を立ててくれた。彼はそのような人間だからこそ、多くの友人たちに囲まれているのだろう。残念なことに、彼は卒業論文を提出せねばならないとのことで、留学は半年間にして、2 月一杯でメキシコへ帰ってしまった。週末に何処かへ出かけようとした時、彼がもう私の近くには居ないことを思い出し、寂しい気分になる。

### 3. トビアス・ダルマサーラ・タム君 (Tobias Dharmasara Tham)

三人目は、私のタンデム相手であるトビアス・ダルマサーラ・タム君である。彼はベルリン自由大学日本学科の学部生で、副専攻で宗教学もやっているという。出身はベルリンであるが、両親は冷戦時代の東ベルリンの出身で、無宗教だという。既にベルリンのフンボルト大学で化学を修めたものの、やはり日本学への関心を捨てられず、自由大学に入り直して現在に至るようだ。トビアス君本人は仏教徒で、「ダルマサーラ」は僧侶としての名前だそうだ。西洋人の間でも仏教は人気らしい。彼の所属する共同体の拠点はイギリスにあるため、頻繁に独英を往復していたが、そのために彼の英語は非常に流暢なものとなった。「ダルマサーラ」と聞いた時、私は東南アジア系の人なのかと思い込んでいたが、実際に対面した時、金髪碧眼の如何にもドイツ風な人物が出てきて、少し驚いた記憶がある。

---

<sup>5</sup> 1968 年 10 月 2 日、メキシコ五輪の直前にメキシコシティで起こった、軍と警察による学生と民間人の虐殺事件。

だがもっと意外だったのは、彼が日本学を専攻するに至った契機がアニメやゲームではなく、それどころかほとんどサブカルチャーに触れてすらいなかったことである。彼の主な関心の対象は文楽や歌舞伎にあった。これは私だけでなく日本学科外の自由大生も持っている印象なのだが、日本学科に所属する学生のほとんどは物好きな「オタク」だけであると思いついていた。日本文化の影響力を過大評価することは禁物だが、そこまで小さなものというわけでもないのかもしれない。

トビアス君はとても礼儀正しく、細やかな気遣いのできる人物であるほか、非常に規律正しい生活を送っているようだ。というのも、彼は毎朝 6 時に瞑想を行い、食生活は菜食主義で通しているからである。私は宗教が彼の生活を規律化させているのだと思い、精神的危機の時期に何度か教会で祈った経験から、自分も信仰心に目覚めれば研究生生活も生産的になるのではないかと考えるようにもなった。だが菜食主義は、大食らいである私にとっては貫徹し難い信条である。

彼は菜食主義者ではあるが、環境保護運動にはそこまで関心が無いようだった。11 月末のある日、我々二人が大学の食堂で会食していると、拡声器を持つ学生たちによって次のようなビラが配られた。「気候変動否定論者でファシストのベアトリクス・フォン・シュトルヒ<sup>6</sup>はこう予告した。本日 16 時、PCS<sup>7</sup>の行事を妨害すると。我々は要求する。我々の大学にナチスの居場所は無い！PCS と連帯せよ、同講座を AFD は妨害せんとしている。(中略) FU にナチス無し！」。彼はこれを見て「シュトルヒという人は妨害するなんて言ってないよ」と言い、一笑に付していた。この背景として、当時から青年活動家グレッタ・トゥンベリ氏を旗手とした「未来のための金曜日」(Friday for Future) 運動が盛り上がりを見せていた。デモに参加するために語学講座の講師が講座を一日休みにするということがあれば、パレードに参加するような感覚で気軽にデモ行進へ参加する留学生もいた。他方、語学講座でトゥンベリ氏の演説<sup>8</sup>が映像で紹介されると、留学生たちからの感想は「芝居がかっている」(theatralisch) などの批判的な意見が大勢を占めた。また、政府が環境保護を目的に家畜や農薬を規制することに抗議する農家たちのトラクター行進<sup>9</sup>も間近で目撃された。また、ベルリンは環境保護運動の拠点となっていたが、街を歩けば各所で煙草の吸殻が道端

---

<sup>6</sup> AfD の政治家ベアトリクス・アメリー・エーレンガルト・エーリカ・フォン・シュトルヒ (Beatrix Amelie Ehrengard Eilika von Storch, 1971-)。気候変動やジェンダーを巡る諸問題の解決に対し、否定的な姿勢を示している。彼女は 2019 年 11 月 25 日に自身の公式ツイッターで、27 日の PCS の演習「性、自然、身体」(Gender, Nature and Body)に参加すると示唆した。以下参照。[https://twitter.com/Beatrix\\_vStorch/status/1198916608753831943](https://twitter.com/Beatrix_vStorch/status/1198916608753831943) (2020 年 3 月 11 日閲覧確認) ここでは行事の妨害が明言されたわけではないが、学生たちは抗議活動を行い、当日午後に演習自体の中止が発表された。これに対して彼女は、大学は再び「正しい立場を巡る自由な言論と議論による論争の場」にならねばならず、今や大学は「納税者たちの犠牲に成り立つ左派急進主義の牙城」であり、異論を述べるのが許されないどころか、最早それに傾聴することも許されないと非難した。当日の経緯については以下参照。<https://www.welt.de/politik/deutschland/article203866050/Beatrix-von-Storch-will-FU-Berlin-besuchen-Veranstaltung-abgesagt.html> (2020 年 3 月 11 日閲覧確認)

<sup>7</sup> 環境保護運動を行う学生たちによって組織された連続講座「パブリック・クライメイト・スクール」(Public Climate School)。以下参照。<https://studentsforfuture.info/public-climate-school/> (2020 年 3 月 11 日閲覧確認)

<sup>8</sup> <https://www.youtube.com/watch?v=qHqKaDUIVhM> (2020 年 3 月 11 日閲覧確認)

<sup>9</sup> <https://www.jiji.com/jc/article?k=2019112601095&g=int> (2020 年 3 月 11 日閲覧確認)

## 「灰色の都」で出逢った人々

に捨てられていた。環境保護を巡る人々の認識には温度差があるようだ。

ところで、私が精神的危機に瀕していた頃、私が心の捌け口として日記を書こうかと考えている旨を伝えたところ、トビアス君は「自分の考えたことや思ったことは文章にして表現した方が良い」と賛同し、それをドイツ語で書く時の査読をしてくれた。先述した12月半ばの投稿も、彼が監修したものであった。今思えば、あんな陰鬱な文章を読まされて、あまり良い気分ではなかつたろうと思う。これ以来、今のところ陰鬱な内容の投稿はしていないつもりだが、ささやかな旅行記録などをドイツ語で書くようにして、それを彼に監修して貰っている。今、私のフェイスブックはほとんどドイツ語で運用されているが、これは彼に負うところが大きい。

## おわりに

今回のベルリン留学の前半を振り返ってみると、幸せなことに私は周囲の人々に恵まれていたと言える。また彼らとの交流を通じて、浅学ながら現今の海外事情について少なからぬものを知ることができたと思う。それと同時に、一人の人間が異国で外国人として暮らすことの辛さも思い知った。これまでのベルリン生活では、良いことよりも嫌なことのほうが多かったが、そうしたことは一旦措いて、自分が感謝すべき人々のことを書き記しておくことで、今後への活力としたい。

(京都大学大学院修士課程)